

# 国語科

# 国語科を通して育成する「自立した学習者」

## 学びの往来による自己調整学習

### 〈個と協働の往来〉

自分の考えをもったうえで、他者との交流によってずれや不整合があることに気付き、それを踏まえたうえでの各自での納得解の深化 等

### 動機付け

### 学習方略

### メタ認知

### 〈教師と生徒の間の

### 学びのイニシアティブの往来〉

生徒・教師間での「学習材」「学習課題」「学習過程」「学習形態」「学習環境」等の選択権・決定権の調整 等

### 〈今の自分と過去の自分の往来〉

省察や自己内対話による自己理解と、それに基づいた学習の見直し、モニタリングによる学習の改善、自己の変容の実感 等

## 国語科における「深い学び」

言語生活の中で言葉を意識し、言葉による見方・考え方を働かせながら、主体的かつ適切に思考・判断・表現していくことで得られる言葉に対する認識の変化

## 育成すべき「国語」に関する資質・能力

### 〈自らが身に付けた「国語」を社会や人生で生かそうとする力〉

- 他者のものの見方・考え方を認め、自らのものの見方・考え方を広げたり深めたりしようとする力
- 伝え合い、相互理解しながら、新たな価値を創造しようとする力（合意形成・対話力）
- 情報を活用して、考えたり表現したりしようとする力
- 言語文化に親しみ、尊重しようとする力
- 言葉の曖昧性を理解した上で、言葉が持つ力を信頼し、言葉によって困難を克服し、言葉を通して社会や文化を創造しようとする力
- 読書に親しんだり読書をして認識を深めたりしようとする関心・意欲・態度
- 言葉を適切に用いる素地となる人間性 等

### 〈生きて働く「国語」に関する知識及び技能〉

- 話し方・聞き方に関する知識や技能
  - 書き方・読み方に関する知識や技能
  - 語彙力（漢字・語句…）
  - 書写技能 文字の知識
  - 国語の特質についての知識（文法・言葉の役割や歴史等）
- 〈情報スキル〉
- 情報の収集・整理の知識や技能 等

### 〈未知の状況においても、「国語」を使って適切に思考・判断・表現し、課題を解決したり価値を創造したりする力〉

- 目的に合わせて適切に言語を用いる力
- 言語を用いた想像力・言語による感性
- メタ言語能力 ○伝え合う力
- 論理的な整合性を判断する力
- 言葉について建設的な批判ができる
- 言葉についての多角的な思考力 ○読解力・聴解力
- 考えを形成し深める力 等

## 実践事例 1

### 第3学年「B書くこと」を通じた語彙指導の実践

#### 1 単元名

「ことば」を見つめて考えよう

—思いにふさわしい語句を選んだり、表現を工夫したりして文章を書く—

#### 2 本校の研究と本実践の関わり

##### (1) 研究主題との関わり

本単元では「その感情を伝えるにはどの語句を用いながらどう表現するか」という大きな学習課題を追究しながら、伝えたい感情と語句の関係についてより豊かな語句の中から選択したり、表現を工夫したりして文章を書く活動を行った。その際、題材には、心動かされた出来事として生徒たちが約2年半取り組んできた部活動を取り上げた。部に入る選択をした生徒としなかった生徒、それぞれがお互いの体験と感じたことを共有するために、作文を書いて読み合うという場を設定した。部活動に関する（部に所属していないということも含めて）ある場面で自分の内に生じた感情をできる限り克明に書き残し、クラスメイトに伝えることをめざすことで、主体的に学習に取り組めると考えた。

##### (2) 自立した学習者像について

本単元では、目的に応じて適切な語句を選び、豊かな表現をしようとする過程で自己調整学習ができる生徒を「自立した学習者」とした。文章表現において語彙力が不足している実態にある生徒に、上記の力を身に付けさせるために、生徒が生じた自らの感情とそれを表す語句や表現との適切さについて、「どんな言葉を使って、どう表現すればこの思いは伝わるのだろうか」の追究・解決をめざした。その際には、類義語辞典等で語句を増やす方法を知ったり、調べた語句群を分析する観点を見出したり、さらに実際に文章を書いたり、それを互いに読み合ったりする活動に取り組ませた。この活動を通して、生徒は自分が伝えようとする感情をメタ認知し、分析的に捉え直す自己調整学習を行うことができると考えた。（詳細は後述）そして、将来的に様々な文章を書く機会を得るたびにその思考を働かせ、それを積み重ねるこ

とで、目的に応じて適切な語句を選び、豊かな表現ができる「自立した学習者」の育成につながり、本単元で設定した「自立した学習者」像に迫ることができると考えた。

##### (3) 学びの往来について

単元の根幹である大きな学習課題の追究過程において、教師と自分の間で、友達と自分の間で、そして自分自身の中で、つまり「個と協働」という学びの往来を通して、「なぜその語句を選ぶのか（他の語句ではいけないのか）」という、言葉による見方・考え方を働かせるための問いかけを重ねていく。この問いは連動して「そのときどんな感情だったのか」という問いを生起させる。つまり感情を表す語句を選ぶことは、自分が伝えようとする感情をメタ認知し、分析的に捉え直す自己調整学習に繋がるわけである。例えば、例文をもとに、その感情を分析したり、それを表す語句を考えたりしながら全体で話合う活動においては、友達の発言により、自分（個）では気付かなかった感情に思い至ったり、より最適の語句に出会ったりできる。この活動自体が個にとってはメタ認知活動となるが、この活動をモデルとして、個人の推敲作業に戻った生徒が自分の文章に向き合ったとき、改めて「なぜこの語句を選んだのか」「そのときの感情はどうだったのか」と自問自答するきっかけとなる。

さらに、メタ認知的モニタリングを通して新たな疑問をもった生徒は、メタ認知コントロールの際、感情を表すためにより最適の語句を、類義語辞典等を使用して探したり、友達に助言を求めたりすることも考えられる。こうした、「全体⇄個」または「全体⇄小グループ」、「個⇄小グループ」という学びの往来を通して、感情とそれを表す語句とのマッチングを検討することによって、学びの自己調整を図ることができると考えた。

## 3 実践

### (1) 単元について

#### ①設定の趣旨

文章を書くには様々な能力が求められる。その中でも記述段階を左右するのが、表現語彙を豊かにもち、その中から最適の語句を選択しながら用いる力である。これ

については生徒自身も経験的に自覚している。書きたいことが漠然とはあるが、それを表現する言葉が浮かばないことから、多くの生徒が語彙を豊かにしたいという願いをもっている。

一方、教育課程部会「各教科等WGにおける資質・能力の構造化等に関する検討状況」(2026/2/19)では、「目的や場面に応じて、自分の思いや考えに適した言葉を用いて表現することなどに課題」、「AIによる大量の言語生成が可能となり、それをSNS等で容易に発信可能な時代だからこそ、自らの意思や考えを形成・表現することや、他者の経験・感情を理解することといった人間ならではの言語能力を重視する」といった語彙力に関する記述が見られる。本单元の中で、日本語の語句の豊かさを知り、使える語句の量を増やし、生きて働く語彙力にしていく構えをもたせるとともに、「子どもたちの語彙力が乏しくなっている」という状況に対し、生きて働く語彙力をどのようにして身に付けさせていくのかを考え、具体的に指導していくため、本单元を設定した。

その「語彙」であるが、一般的には「語句の集合体」とされている。ここでいう「語句」は、単語に限定せず、慣用句や成句等も含めた「語句」と捉えるのが実際である。なお、本单元では「感情を表す語彙」を中心に扱う。感情を表す語彙を中心に扱うのは、日本語におけるその豊かさを実感しやすい語彙であり、生徒の今後のコミュニケーションにも必要であると考えからである。

## ②単元の目標

- 感情を表す語句についてその多様性や差異等をつかみ、最適の語句を選択するための辞書の使い方や語句選択の観点について理解することができる。

### 【知識及び技能】

- ◎ 語句を捉える観点を多様に見出し、表現したい感情を的確に表現する際の語句選択に生かすことができる。

### 【思考力、判断力、表現力】

- 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。

### 【学びに向かう力、人間性等】

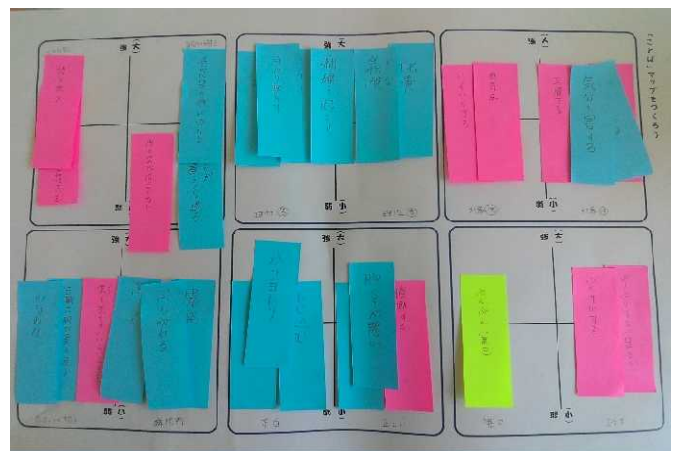
## (2) 単元全体の流れ (全8時間)

**第1時** 部活動に関わる事柄の中で抱いた気持ちを伝

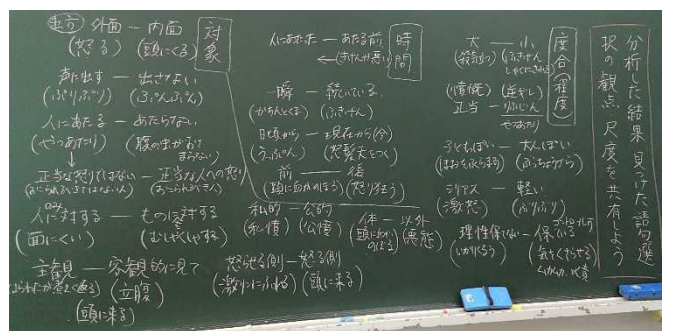
えたり、残したりする文章を書く。その上で、書いた文章を読み返し、感情を記述する際の使用語句や表現の傾向を自覚し、問題点や悩み等をもとに課題意識や学習の目標をもつ。

**第2時** 「怒」に類する様々な語句を、想起したり辞書から引いたりして集め、感情を表す語句の豊かさを実感する。

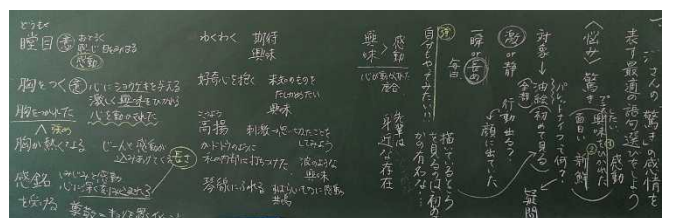
**第3時** 「怒」に類する語句群を語句の意味の微妙な差異を考えながら並べて「ことばマップ」を作成することで、語句に対する見方・考え方を広げる。(下:「ことばマップ」の実際)



**第4時** 感情を表す語句の分析をもとに語句選択の観点を整理する。(下:観点の整理の実際)



**第5時** 実際の文例を対象に、最適の語句を選ぶために吟味すべき要素(感情自体の捉え、個々の語句が表す意味やニュアンスの違い等)について全体で考え、話し合う。(下:話し合いの結果の板書)



**第6時** 前時の全体での話し合いを踏まえ、小グループで一人一人の語句を検討する。(本時)

**第7時** 自身の文章をよりよく加除修正し、書き換えた意図の解説も書き加える。

**第8時** 推敲後の文章や、書き換えの意図の解説を読み合い、学習のまとめをする。

### (3) 本時の授業の実際

第5時での話し合いをモデルとして、各自自分の語句の再検討を行った。教師のほうで、生徒一人一人が検討したい語句を予め把握しておき、同じ語句(意味の近い語句も含む)同士が集まるように意図的に3人の小グループを作った。また、誰がどの語句を検討したいかがわかる一覧表を用意し、小グループでの話し合いの途中でも他グループとの交流を図ってもよいことを授業開始時に指示した。以下は、小グループでの実際の話し合いの様子である。

A: 出席番号順で、私から始めます。私は「寂しさ」という表現を改善したいです。2年間部活を続けてきて今年で終わってしまうというニュアンスで書いたのですが、「寂しさ」の3文字でまとめてしまうのは少し違う気がしています。ただ終わってしまう寂しさというよりも、「もう少し続けたい」という心残りや、「楽しかったな」という感情も含まれているため、「寂しさ」と要約するのはもったいないと思いました。抽象的すぎるので、初めて読む人にも自分の気持ちがより伝わる細かい言葉にしたいです。

B: 「切ない」や「手放したくない」はどう? 「辛い」などのマイナスの感情というよりは、今まで楽しかったから「もう少し今の状況が長く続いてほしい」という未練や心残りに近いね。辞書で調べると「名残惜しい」という言葉があるよ。「強く心を惹かれるものがある、去るのが辛い」という意味だから結構当てはまるんじゃないかな。

A: 「名残惜しい」は私の感情に結構近いです。去るのが辛いだけでなく、もう少しこの場所にいる

続けたいという気持ちがあります。辛い感情と続けたい感情の2つに分けて、「名残惜しいが、まだ続けたい気持ちがより強くなった」というように表現してみようと思います。

B: 次は私の文章を見て。同級生のように自分も成果を残したい、という気持ちについてです。目に見える形で成果が現れていたり、頑張れる環境に身を置いている同級生が羨ましいです。完全に諦めているわけではなく「自分もこうなりたい」という思いもありますが、自分と比べてしまって、少しネガティブ寄りの「羨ましい」という感情を抱えています。

C: 妬みや嫉妬が強すぎる表現は避けたいね。シンプルに「羨ましい」という言葉を使うか、「自分もそうになりたい」という「憧れ」のニュアンスを入れるのが良いかもしれないね。

B: 難しいな。(この後、三人で類語辞典等を使って言葉を探す時間になる。)

(中略)

C: 私は、暑い中で運動しなくて美術部に入りました。後悔や心残りというほど強いネガティブな感情ではなく、「なんだかんだ言ってこれよかったな」と思っています。ただ、暑い中を自転車をこいで部活のために登校しなければならない状況に対して、「嫌だな」「不本位だな」という些細な不満がありました。

A: 部活自体には満足しているけれど、夏の暑さに対して少し不満がある状態なんだね。それなら、「煩わしい」という言葉はどう? 「夏の暑さは煩わしい」という表現がぴったり合うんじゃないかな。

C: そうだね、「煩わしい」がしっくりくるかも。

## 4 成果と課題

### (1) 「学びの往来」を実現する単元構成

#### ①「全体⇔個」の往来

第5時では代表生徒の書いた文章をもとに、感情を分析したり、それを表現する語句を考えたりしながら学級

全体で話し合った。その際、初めは教師が中心となって、「なぜその言葉を使ったか」あるいは「その語句で表したいのはどんな感情か」「そのときの情景や背景はどのようなものだったか」などと問いかけ、無意識に行った語句選択を思い起こさせ、その思考・判断を意識させた。途中からは、他の生徒にも質問させ、語句を選ばせた。代表生徒はそれに答える中で自分の感情を表す語句についてさらにメタ認知し、より最適の語句へと改善しようとしていた。以下は第5時の話合いの様子である。

S 1 : 僕の悩みは文中に2回出てくる「楽しい」なんだけど。この2つの「楽しい」は違う意味なのに、よい言葉が思いつかない。

教師 : それぞれどのような状況なのか説明して。

S 1 : 1つ目は試合に勝った直後の感情で、2つ目は次の日以降もずっと感じていることです。

教師 : じゃあ、1つ目は「瞬間的」なもので、2つ目は「継続的」なもの？

S 1 : そう。

(中略)

教師 : 他に質問のある人はいますか。

S 2 : 1つ目は勝ったことで生まれた感情だから、「うれしさ」も入ってる？

S 1 : うん。よいプレーができて、うれしくて。

S 2 : だったら、「満足感を覚えた」という言葉はどうか。

S 1 : 満足というか、満たされてはいないな。

S 3 : 「有頂天」は？辞書的には「最高の気分。夢中になる」という意味だよ。

S 1 : 「夢中」という気持ちはあったかも。

(以下略)

このように、「全体」（ここでは学級）で検討することで、「個」（ここでは代表生徒）にとっては自分にはなかった見方・考え方を獲得することになり、「この語句でよいのか」「もっとより最適の語句はないか」というメタ認知を働かせることができた。

## ②「全体⇔小グループ⇔個」の往来

第5時で行った上記の学習活動自体が、第6時（本時）で行った小グループ内での学習活動の進め方のモデルと

なっている。以下は第6時の話合いの様子である。

S 3 : 私は「よかった」って書いたんだけど、これだと抽象的で大まかすぎるから、もうちょっと詳しい別の言葉が欲しいんだよね。

S 4 : 「楽しい」はどう？でも「よかった」や「いい気分」とはちょっと違うし、言葉を変えるのが難しいね。

S 5 : 前の授業で「楽しい」について考えたとき、「感動」みたいな意味もあるって話したよね。今までできなかったことができた、みたいな。

S 3 : それなら、瞬間的な「やった！」じゃなくて、じわじわ来る持続的な楽しさがいいな。

S 4 : 部活に入って、みんなが優しくしてくれて楽しい、みたいなずっと続いている楽しさだね。「嬉しい」の仲間かも。

S 3 : 「楽しい」と「嬉しい」は近いけど、「喜ばしい」とは少し違う。自分の気持ちを表すならもっと感動的な要素が入っている言葉がいい。

S 5 : 「胸に響く」や「胸が熱くなる」はどう？「胸が詰まる」まで行くと少し苦しうだけ。

S 4 : 「心に染みる」や「しみじみ」もあるけど、落ち着きすぎてるかな？

S 3 : もっと元気な感じがいいな。

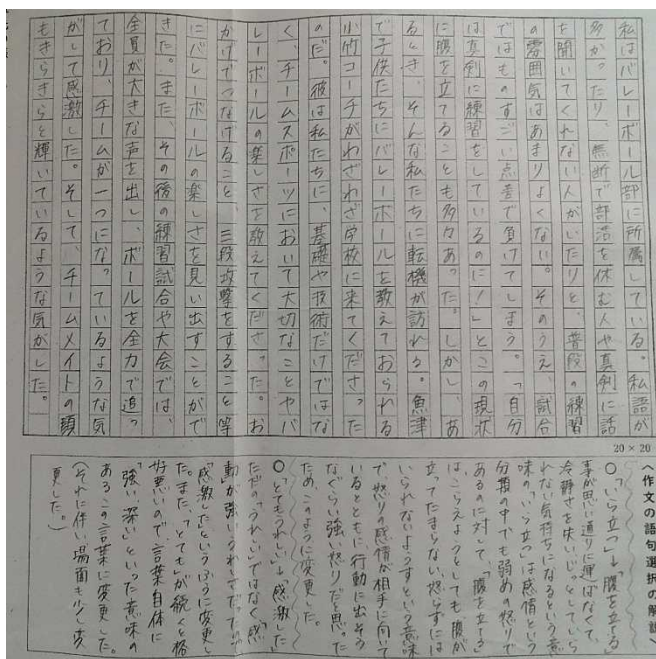
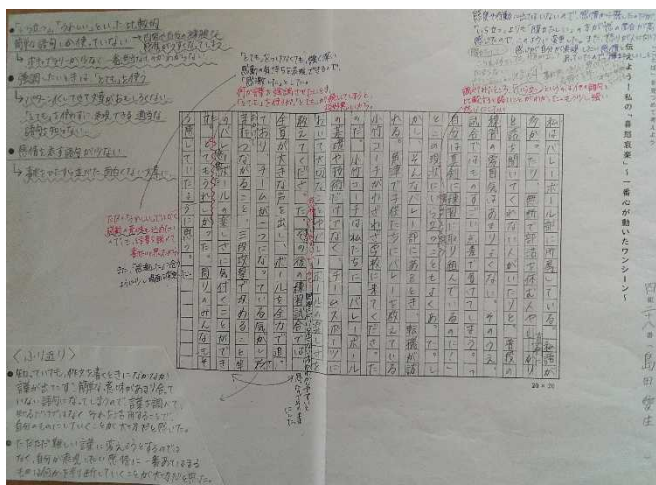
S 5 : 「晴れやか」や「心地よい」もよさそう。「せいせいした」は、嫌なことが終わった時のマイナスからのプラスって印象だからちょっと違うかな。

S 5の前時に関する発言をきっかけに、S 3は「楽しい」を「時間」という見方・考え方で捉え始めた。また、そこから感動の大・小やニュアンスの静・動の度合いの吟味になり、前々時までに獲得した語句選択の観点とそれをどう活用するかという前時のモデルを生かした話合いとなっていることが分かる。

## (2) 「自立した学習者」育成に必要な資質・能力を身に付けるための自己調整学習

第7時では、モデルを参考に、小グループでの実践を経て、メタ認知の働かせ方を学んだ「個」が、各自学習方法を自己調整しながら、自分の選択した語句を検討し、

作文を推敲した。推敲作業を行う際には、前時までの小グループでの検討結果をもとに、改めて自分で「なぜこの語句を選んだのか」「そのときの感情はどうだったのか」というメタ認知的モニタリングをし、コントロールする必要がある。生徒の中には、「個」で自分の感情を掘り起こしたり、類義語辞典を活用して言葉を吟味・選択したりする者もいれば、再び目的に応じた小グループをつくり、相談・助言し合ったり、自分にはなかった見方・考え方を得たりする者もいた。また、両者を組み合わせている姿も見られた。各自、自分には今何が必要かを判断しながら、推敲作業を行っていた。(下: 推敲前と推敲後のワークシート)



作文を推敲後、語句選択の解説も書かせた。自身の思考を振り返ることは、自分のメタ認知モニタリングとコントロールの過程を振り返ることにつながる。この学び

の実感が別の場面でも発揮できる力となるはずである。

振り返りにおいて、効果的だった学習方法を問うところ、「一度自分で調べたのち、友達に違う視点からの助言をもらう」「同じ感情の小人数グループでの学習活動」「友達にたくさん質問してもらい、自分の感情を客観的に分析してもらおう」「違う感情を考えているグループに話を聞きに行ったこと」「類義語辞典でとりあえずたくさんの言葉を探して、近いものを選ぶ」など、多種多様な回答を得た。最適の語句選択の過程で自分の学びを調整していることがうかがえる記述である。

また、今回の学習は「書くこと」の学習であったが、感情を掘り下げる時間でもあったため、「読むこと」の学習に関連して、登場人物の感情を読み取る際に生かしたいという振り返りも見られた。今回の学習を「書くこと」以外でも次の学びにもつなげようとする学習者の姿勢もうかがえた。

### (3) 今後の課題

第5時の小グループでの学習において課題が残った。同じ語句同士が集まるように意図的にグループを編成したが、やはりスムーズに話し合いが進まないグループもあった。そのグループには教師が机間指導でフォローしたが、全13グループの中で複数のグループにフォローが必要な場合、時間的に限界があった。他グループとの交流をもっと促したり、前時までの学習で個に応じた指導や支援の在り方を工夫したりする必要がある。

また、評価の方法にも課題が残る。ルーブリックを作成したものの、扱う対象が言葉であるため、「最適」の基準は書き手(学習者)と読み手(評価する教師)では一致しづらい。必然、評価する対象は完成した作文ではなく、「なぜその言葉にしたのか」という生徒の自身の解説になる。そのため、いざ評価しようとなるとABCのはっきりとした線引きが難しいことが分かった。指導者の中で明確な基準をもつことは当然としつつも、ルーブリックの在り方も含め、作文の内容への評価について研究が必要である。

### 【参考文献】

・萩中奈穂美「国語科における『語彙学習力』の育成 一

語句を捉える観点を豊かにする指導ー」全国大学国語  
教育学会 第137回大会 2019

(授業者 丹保 芽久美)

## 実践事例2

### 第1学年「B書くこと」における実践

#### 1 題材名

「修学旅行は富山に行こう」

#### 2 本校の研究と本実践の関わり

読み手に自分の考えを納得させられる意見文を書くために、根拠として示す情報や理由付けが適切であるかを吟味する。個人や協働での吟味を繰り返すことによって相手に考えを納得させられる意見文を書くことができるようになる。

本単元では、「意見文に説得力をもたせるにはどんな工夫が必要か」という学習課題のもと、意見を支える根拠と理由付けを明確にしなが意見文を書く学習を行う。学習過程では、教師や友人との対話、自分の書いた意見文の推敲、振り返りといった「個と協働」、「過去と現在」の往来を通して、生徒は「どのような根拠を用い、どのように理由付けを行うべきか」を考える。

意見の根拠や理由付けを吟味する活動により、生徒は自身の思考をメタ認知的に振り返ることができる。また、意見交換を通して他者の視点を取り入れることで、自身の論理の妥当性を分析的に捉え直したり、自分の意見がどのように受け取られるかを確認したりしながら学習を進めることで自己調整学習が促される。

このように「全体⇔個」や「個⇔小グループ」の往来を通した考えの吟味は、言語内容と表現形式を往復させる国語科の思考を促進する。この学習活動を通して、将来的に様々な場面で、目的に応じて形式を選択し、内容や表現を吟味して文章を書くことのできる「自立した学習者」の育成が期待される。

#### 3 実践

##### (1) 単元について

##### ①設定の趣旨

本単元を設定した背景として、生徒たちの「自分の考えを伝えたい」という意欲をもちながらも、それを言語化することに自信がもてず、不安や戸惑いから発言をためらう傾向がある。この要因として、自分の考えを根

拠とともに整理し、論理的に構成する経験が不足しているのではないかと考えている。また、SNSの普及により短文での即時的なやりとりが増えたこと、生成AIの普及により複雑な思考を言葉で表現する機会が減少していることも影響しているのではないかと考えている。

こうした状況において、国語科において自分の考えを形成し、根拠をもとに筋道を立てて伝える力を育成する意義は大きいと考える。意見文を書くことは、主張を支える根拠を明確にして説得力をもって表現する力を養うとともに、他者の意見に触れることで自己の考えを見直し、吟味していくきっかけとなると考えるからだ。

生徒の実態としては、自分の考えの構成が曖昧で、発信への自信に乏しいだけでなく、他者の意見に対して根拠や妥当性を問い直す視点も十分に育っていない。また、日常的な記述においても理由や背景が不十分であることが多い。「書くこと」の学習では情報の取捨選択や構成の重要性について一定の理解が見られるが、「読むこと」においては主張、根拠、理由の関係把握に課題が残っている。以上を踏まえ、本単元では、生徒が明確な根拠に基づく理由付けを行って意見文を書く活動を通して、自分の意見を論理的に表現する力の育成をめざす。

本単元では、説得力のある意見文の書き方を学習する。文章の型や形式を覚えるだけの表面的な学習に終わらせないため、読み手を「修学旅行先を東京都と富山県のどちらにするか検討している大阪市内の中学校教員」と設定し、その読み手に「修学旅行は富山県に行こう」と考えさせるための意見文を書く活動を設定した。近年、中学生の修学旅行先として定番であった東京都や京都府は滞在費の高騰やオーバーツーリズムの影響により選ばれにくくなっており、富山県としても教育旅行先としての誘致を進めている。このような社会的状況を踏まえた課題を設定した。また、生徒はこれまで総合的な学習の時間において「富山の文化」をテーマに探究活動を行い、富山県の多様な文化や産業、天然資源について理解を深めている。さらに、校外学習では富山市内で班別学習を行い、体験学習や見学を通して地域への理解を深めた。これらの学習経験を生かすことで、生徒が実体験に基づいて考えを深めながら文章を作成することができ

ると考えた。

さらに、読み手を具体的に設定したことには相手をどのように説得するかという視点から思考を促すねらいがある。大阪府は東京都と富山県のいずれにも移動時間や費用が比較的近く、旅行先での活動に焦点を当てて考えることができる。さらに、読み手は修学旅行に「体験型の学習」を求めていると設定した。そうすることでどのような内容を取り上げることが納得を得るために有効であるかを考えることにつながり、より具体的に相手意識をもたせられると考えたためである。「体験型の学習」には自然の中でのものや伝統工芸、先端技術など様々なものが含まれるが、生徒が題材を選ぶ際に工夫の余地を残すため、あえて幅のある条件とした。

以下は、初稿段階で生徒が書いた意見文である。

私は、修学旅行先には富山県がよいと考えます。その理由は東京都と富山県を比べたときに、富山県にメリットがあるためです。

一つ目に、都市と地方の差です。東京都は観光客が多く、落ち着いて学習することが難しいかもしれません。富山県は観光客が東京よりは少なく、修学旅行に向いています。予算の面でも、東京都ではホテル代が高くなっていると聞きます。一方、富山県ではホテル代は東京都より安くなります。

二つ目は、自然の豊かさです。富山県にある黒部ダムは代表的な観光地ですが、冬には雪景色、秋には紅葉、夏には清流、春には新緑と様々な顔を見せてくれます。それぞれに違った美しさがあります。ぜひ体験してください。

この意見文に現れているように、観光客の多寡が修学旅行先としてのふさわしさに関連があるかどうかや、自然の風景から想定している読み手が希望している「体験型の学習」がどのように実現されるのかがわかりにくいということなど、根拠と理由付けが適切でなかったり、相手意識の不十分さに課題があったりする生徒が多かった。このような状況の生徒が説得力のある文章を書く手立てを身に付けることができるのかを明らかにすることがねらいである。

なお、初稿段階で多くの生徒が金銭面でのメリットを

挙げていた。滞在費は富山県の方が安くなる場合が多く、体験活動に多くの予算を割くことができると考えられるため、根拠として有効ではあると考えられる。しかし、本単元では提案する体験そのものに注目して論理構成や内容を検討させたい。そこで、教師がその部分を書いた原稿用紙を用意し、それ以外の根拠を生徒が書き足すという形式をとった。生徒が吟味する部分を絞り、考えを深めることもねらいである。

本単元では説得力のある意見文を書くために、主張・根拠・理由付けの関係を明確にする論理構成の効果を学ぶことを活動の中心とする。ここでは「説得力」を読み手にその意見の価値を認めさせる力と定義し、

- ・具体的で明確な根拠
- ・読み手の要望に応じる理由付け
- ・想定される反論への反駁

に注目し意見文を吟味することとした。根拠と理由付けを吟味する際には三角ロジックを用いる。これは、論理構造を可視化することで根拠と理由付けの違いを理解し、説得力ある事実を根拠として選択できるようにすること、自分の考えを確認しやすくすることによって論理的に思考する力の向上をねらうためである。さらに、検討の際に論理構造に焦点化しやすくさせるため、文章の構成は「意見—根拠—理由付け—反駁—まとめ」の形式に限定する。理由の吟味においては自分の主張が読み手にどのように伝わるかを意識しながら文章を再構成させる。また、読み手の立場や心情を推測し、反論に対応する反駁を考える活動を通して相手意識を育てる。

そして、吟味をする際には全体やグループでの意見交換を実施し、相手にどう読まれるかを確認しながら学習を進める。相手からの意見を自分の考えに取り入れていく活動は、自分の構想した論理が他者から妥当性をもって受け入れられるのかどうかをメタ認知し、分析的に捉え直す自己調整学習に繋がると考える。

最終的には、これまでの検討や推敲を踏まえて再度意見文を書き、初稿と比較しながら思考の過程を振り返る。この一連の活動を通して生徒は自分の考えを論理立てて整理し、相手の存在を意識して伝える方法を実践的に学ぶことができると考える。

## ②単元の目標

- 意見と根拠など、情報と情報との関係について理解することができる。 【知識及び技能】
- ◎ 根拠を明確にしなが、読み手を納得させる文章になるように工夫することができる。 【思考力、判断力、表現力】
- 言葉がもつ価値を認識し、我が国の言語文化を大切に、思いや考えを伝え合おうとする。 【学びに向かう力、人間性等】

### (2) 単元全体の流れ (全8時間)

第1次 題材に応じた意見文を書く。

- ・ 「富山県を修学旅行先に選んでもらおう」という課題と想定する読み手を伝え、根拠となる情報を収集する。

…………… 1時間

- ・ 収集した情報を用いて意見文を書き、読み合う。

…………… 2時間

第2次 自分の書いた意見文の構成を、三角ロジックに当てはめて吟味する。

- ・ 自分の書いた意見文を三角ロジックに当てはめ、根拠と理由付けが明らかに示されているかを確認する。 …………… 1時間
- ・ 教師が例示した三角ロジックについて全体で検討し、根拠と理由付けの関係について考える。 …………… 1時間

- ・ 自分の論理を再検討し、想定している読み手の反応を考え、反論を考える。 …………… 1時間

第3次 意見文を書き直し、自分の書いた文章がどのように改善したかを考える。

- ・ 第2次までの振り返りを生かして、意見文を書き直す。 …………… 1時間
- ・ 当初書いたものと書き直したものを比較し、考えを伝えるためには何が必要であるかをまとめる。 …………… 1時間

### (3) 授業の実際

**第2次** 本時の学習課題を「自分の考えを相手に納得

させるにはどのような根拠と理由付けが必要だろうか」とし、教師が例示する三つの三角ロジックをについて根拠と理由付けが適切かどうかを検討し、改善策を検討する活動を行った。第1次に生徒が書いた意見文から、論理構成に改善が必要と考えられるものを取り上げ、なぜ改善すべきか、どのように改善すべきかを考えた。自分の構想している論理展開を見直すきっかけになると考えたからである。

一つ目は根拠が今回の意見文に適さないと考えられる例である。意見文として限られた字数のなかで相手に考えを伝えるときに、修学旅行の目的を果たすためにも根拠として最適なものではないことに気付かせたいと考えた。

例1	
主張：修学旅行は富山に行こう。	
根拠：富山県には世界一美しいカフェがある。	理由付け：富山県にしかない魅力的な観光名所だから。
【生徒の意見】	
・ カフェは目的に修学旅行をしても面白くないんじゃないか。	
・ 「世界一」という評価が誰からの物なのか曖昧だから、事実かどうかわからない。	
・ いろいろな観点で「世界一」もカフェは富山県や東京都に限らずどこにでもあるから、理由付けが成立していない。	
・ 本当にそのカフェが素晴らしい場所だとしても、どんな「体験型の学習」という希望に対しては適切とは言えない。	

生徒たちは一見して根拠が最適なものではないと感じたようだったが、その理由として「面白くない」といった抽象的な意見を述べる生徒がいた。漠然と不適切であると考えただけでなく、どこが不適切なのかを明確にするよう促したところ、「体験型の学習」を希望するという読み手の要望との乖離に気付くことができた。

二つ目の例は、根拠と理由付けが抽象的なものであ

る。

## 例2

主張：修学旅行は富山に行こう。

根拠：富山県にはいろいろな自然がある。

理由付け：実際に来ないとそれは体感できないから。

### 【生徒の意見】

- ・体験は学びにつながるから、いい理由付けだと思う。
- ・いろいろな自然があるのは確かだと思うけど、ぼんやりしていて何を売りにしたいのかわからない。
- ・黒部ダムでの水力発電や、富山湾での水産資源保護など具体的なものを紹介した方がよいと思う。
- ・根拠が曖昧だと、理由付けもそれ以上に曖昧になるから、根拠となる事実はよく考えて選ばないといけない。

この例については生徒から改善が必要という意見が多く挙がった。抽象的な根拠では論理の全体が曖昧になってしまうことを理解できている様子であった。

以上の例から、読み手の立場に立って必要な情報を具体的に示すことが必要であることを確認したうえで三つ目の例を示した。

## 例3

主張：修学旅行は富山に行こう。

根拠：富山県では金属加工や製菓など、多様な体験学習ができる。

理由付け：体験学習が生徒にとって貴重な経験になると思うから。

### 【生徒の意見】

- ・具体的な活動を示しているから、富山県で何ができるのかが分かりやすい。
- ・富山県での体験活動は「学び」につながると思う。
- ・富山県のよさを伝えることにはなるけど、富山県に行くのが一番よいことにはならないのではないかな。
- ・他のところでも体験はある。東京でもできるかもしれない。比べたときのよさも示すといいと思う。

例3では、修学旅行先に富山県を選ぶことのよさを示

すことができているという意見が多かった。一方、これで相手を説得できるかどうかという点については疑問が残った。今回想定している読み手は富山県と東京都の二択から検討しているため、比較した際の優位性を示すべきではないかという意見も挙がった。

三つの事例を踏まえ、自分の意見を相手に納得させるためには「具体的な根拠を示すこと」「根拠と理由付けが関連していること」「読み手にとって価値のある情報を伝えること」が重要であるという結論に達した。以下は授業終了後の生徒の感想である。

- ・どうやって書けば意見文になるのかわからなかったが、三角ロジックが成り立つように書くと話の筋が通ることが分かった。
- ・なんとなく自分の書いたものに自信がなかったが、その理由が根拠の曖昧さにあることに気付いた。
- ・自分なりに説得力のあるものを書けたつもりだったが、例について考えているうちに富山でなくてはならないことか自信がなくなった。根拠についての情報をもっと確認したい。

本時の活動を通して、生徒たちはどのような論理が説得力をもつかを考え、自分の書いたものを見直し、改善すべき点に気付くことができた。

## 4 成果と課題

### (1) 「学びの往来」を実現する単元構成

本単元の学習では過去と現在を往来する自分の書いた意見文を見直す活動（第2次、第3次）と、個と協働を往来する文章を読み合い、評価し合う活動（第2次）において学びの往来の実現を図った。単元当初に書いたものを見直すことで自分の思考の過程をメタ認知することがねらいであった。

過去と現在を往来するなかでの学びとして、生徒は以下のように実感していた。

- ・初めに書いた原稿では、富山県でできる活動とその特徴を紹介していただけで理由付けができていなかった。

- ・金銭面での東京を選ぶデメリットを挙げていただけで、「富山に行こう」と思ってもらいにくいものになっていた。
- ・変わったことを書けば目立っていいかと思っていたが、意見をわかってもらうためには筋道を立てて説明する必要があるのだと改めて感じた。

これらのように、第2次で検討した説得力のある意見文を書くための条件をもとに見直し、改善していこうとする姿が見られた。また、振り返りの際に「初稿時点では〇〇と考えていたが～」と思考の過程を振り返ることができた生徒も多く、メタ認知が働きやすい活動になったと考える。

さらに、個と協働を往来する活動においては以下のような振り返りがあった。

- ・自分の書いたものに自信がもてなかったが、わかりやすいと言ってもらえたり、似た意見を書いている人を見つけたりすることができて安心できた。
- ・作文を見直すときに、正直何を見直せばいいのかわからなかったが、どこに注目したらいいかを教えてもらうことができてよかった。得意な人に見てもらえると参考になる。

というように、他者の目を通しての推敲で論理が洗練されていく過程を体験できた生徒が多かった。また、意見文の根拠と理由付けについても、協働しての検討が有効であった。

- ・自分と同じ根拠を使っている理由付けが具体的な人がいて、参考にすることができた。
- ・富山県の自然の美しさを伝えることで「富山に行きたい」と思わせたかった。しかし、理由付けが「美しいから」だけでは説得力が弱いという意見が多く、自分の思いを伝えるためにこそ理由付けが大切であるのだと感じた。

これらは自分で考えるだけでは気付きにくい視点であり、協働して得られた学びが個での学びに生かされた結果だと考える。

これらのことから、単元を通して自分が書いた文章や考えを振り返る活動を設定することは、メタ認知を促すために有効であったと考える。

## (2) 「自立した学習者」育成に必要な資質・能力を身に付けるための自己調整学習

第8時の話合いの様子を以下に示す。

- T1：この活動の前には、どうすれば自分の意見を相手に納得させられると考えていましたか。
- S2：自分の意見を書くことが大切だと思っていた。自分がこうしたいとか、相手にこうしてほしいとか。
- S3：文末表現を「だ・である」にしてははっきりした書き方にするのも有効だと思っていた。
- S4：人に納得してもらうためには話し方や思いも大切だけど、筋道を立てて伝えることも大切だということがわかった。
- S5：自分の意見を納得してもらうためには、相手が求めていることを考えて、丁寧に伝えていくことが大切だね。
- T2：なるほど。では、自分の意見を伝えるためには、何を書く必要があることが分かりましたか。
- S6：まずは根拠を明確にする必要があることがわかった。自分がいいと思って伝えることでも、そもそも「それ、本当？」と思われると思いが伝わらない。
- S7：そうそう。面白そうなものでも、事実かわからないものは判断の材料にはしにくいよね。
- S8：今回の意見文だと、「豊かな自然が見られる」って言うても「だから？」となってしまう。読み手に魅力を伝えるためには理由付けも重要だった。

T1の問いでは、本単元の学習以前には自分の考えにどのようにして説得力をもたせていたかを振り返らせた。伝えたいという自分の思いを表現すること、書き方の工夫が大切だと考えていた生徒も、振り返りや読み合

い、話し合いを通して論理立った文章にこそ説得力が生まれることに気付くことができた。自分の学習の過程や成果を振り返り、次の改善に生かそうとする自己調整的な学びの姿として捉えることができる。

T2の問いに対する振り返りでは、本単元で大切にしてきた「三角ロジック」の有効性を実感したという意見が挙がった。生徒からは、主張・理由・根拠の関係を意識することで、自分が書いた意見文の論理構成を見直すことができたという意見が挙がった。本単元の学習を通して、生徒が自らの表現を見直し、よりよい書き方を模索しようとする自己調整学習の成果であると考えられる。

以下は、最初に示した生徒が最終的に書いた意見文である。

私は、修学旅行の行先は富山県にするべきだと考えています。その理由は二つあります。第一に、予算面でのメリットです。富山県を行先にするると、宿泊代や食事代を東京都よりも抑えることができます。今回の目的は「体験型の学習」と聞いています。予算に余裕をもたせることで、より充実した修学旅行にできると考えています。

第二に、富山県ならではの自然保護に関する体験学習ができることです。黒部ダムは観光地としても有名ですが、本来は発電所です。皆さんの住む大阪にも黒部ダムから電気が送られています。黒部ダムは大自然の中にありますが、だからこそ建設以来自然と共生するために高山植物やライチョウの保護に取り組んできました。これから情報化が進み、電力がさらに必要になる時代に大切な活動だと考えています。

自然保護はいろいろなところで取り組まれている活動ですが、大阪のみなさんにこそ、実際に来てもらい体験してほしいのです。

修学旅行は富山に行こう！

「黒部ダムでは自然保護活動が実施されている」という事実を根拠として「電力需要の増える未来には、自然との共生が大切だから」という理由付けを行っており、初稿に比べて論理構成は明確であるといえる。また、富山県と大阪府のつながりにも着目し、読み手の立場も意識されていることが分かる。この変容に、本生徒が学び

を自己調整し、題材に対する最適な回答を模索した姿が表れていると考えている。

### (3) 今後の課題

三角ロジックを活用することは、意見文作成において論理的構成を整理する上で有効であり、生徒が自分の書いた文章の論理構造を見つめ直すための手がかりとして一定の効果を発揮することが分かった。

一方、課題の設定には課題が残った。本単元では説得力の定義として、「読み手の要望に応じる理由付け」を設定したが、そこに曖昧な部分が残った。生徒が情報の取捨選択の時点から工夫ができるように「体験型の学習」という幅のあるものを設定したが、それがかえって検討の妨げになっている部分もあった。今回はあくまで論理構成にこだわって考えさせる以上、要望を詳細に設定し、内容面での検討に時間をかけないようにする必要があったと感じている。

今後、場の設定をさらに綿密に行い、生徒になぜ書くのか、何を書きたいのかを明確にさせ、目的に合った内容、構成を選んでいけるようにしていけるよう指導を改善していきたい。

### 【参考文献】

- ・ 大西 道雄「意見文指導の研究」溪水社 1990
- ・ 米田 猛「国語科授業の実践的考究Ⅱ」新踏社 2023
- ・ 櫻本 明美「説明的表現の授業 考えて書く力を育てる」明治図書 1995

(授業者 井田 幸佑)